

## 会 議 録

1 会議名 第1回不登校児童生徒のための教育機会確保に係る検討会議

2 開催日時：令和5年8月24日（木）14：00～15：40

3 開催場所：小倉北区役所庁舎西棟504会議室

4 出席者（敬称略）

（1）構成員

小嶋 秀幹、長阿彌 幹生、シャルマ 直美、畠山 めぐみ、本田 禎之、  
村上 博志、下田 ゆみ、上田 あけみ

（2）事務局

田島教育長、高橋教育次長、高松学校教育部長、浜崎指導企画課長、  
有田生徒指導課長、福岡不登校等支援センター担当課長

5 議題

（1）国及び北九州市の取組について

（2）教育委員会が考える「ゴール」について

（3）ニーズ調査の手法・調査内容について

（4）今後の会議の進め方について

6 議事概要

開会にあたり、田島教育長より挨拶があった。

続いて、「不登校児童生徒のための教育機会確保に係る検討会議開催要綱」の説明、構成員の自己紹介、事務局出席者の紹介があった。

その後、座長（小嶋構成員）、副座長（シャルマ構成員）の選出が行われ、議事に基つき進行した。

## 7 議事要旨

### ○議題（１）「国及び北九州市の取組について」

#### 【事務局】

「資料４ 北九州市長期欠席・不登校の現状と対策について」に基づき説明。

#### 【A構成員】

ステップアップルームというのは、どのように設置されているのか。

#### 【事務局】

中学校はほぼ100%である。小学校は空き教室の問題であったり、子どもたちを見る人員の問題があり、ステップアップルームという別室ではなく、校長室や保健室など、誰か人がいる場所でいっしょに過ごす環境を整えている。

#### 【A構成員】

中学校は全校にということだが、ステップアップルームの子どもへの対応は、どういう対応をされているのか。

#### 【事務局】

そこから自分の教室のオンライン授業を見ることもできるし、「みらいのとびらオンライン授業」に入ることもできる。そういうのが向かないという子どももいるので、別の課題を与えるなど、その子その子にあった課題を与えて、過ごすようにしている。体を動かす時間を設けたりというところもある。

#### 【A構成員】

専任の担当の教師の方がおられるということか。

#### 【事務局】

全校にはいない。中学校も一部のみの配置。専任がいない学校は、管理職などが対応している。

#### 【A構成員】

スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーの配置はどうなっているのか。

#### 【事務局】

スクールソーシャルワーカーについては、担当区があり、依頼を受けて学校に入るという仕組み。

#### 【A構成員】

エリア担当制ということか。

#### 【事務局】

そうである。スクールカウンセラーは中学校区に2名ずつ配置、それから小学校全校にも入っている状況である。

#### 【A構成員】

中学校区に2名、そこから校区の小学校も同時に入る。

【事務局】

そうである。ただ、毎日というわけではない。

【A構成員】

「誰一人取り残さない」という考え方からすると、取り残さないネットワーク、支援体制をどのようにつくっていけばいいか。空間的な配置や、人間的な配置なんかも考えていくと、「これがないときは、このセーフティネットがある」「これがないときはこれが」といったような形の、「誰一人取り残さない」というそういう発想があると支援体制が充実するかなと思う。

【B構成員】

事務局から説明があった総務省のアンケートについて、聞き逃した部分があるが、56%というのは、どういう回答の数字か。

【事務局】

「登校という結果のみを目標にしない」という文科省の指針を保護者の方に知っていますかと聞いたところ、56%の方が知らないと答えた。それに対して、「情報提供を行っています」と答えた教育委員会は71%であった。学校にお尋ねすると79%であった。学校の方は伝えていますが、保護者にお伺いすると知らないと答えたということである。

【C構成員】

ステップアップルームに通っている児童生徒、それから、みらとび・みらチャレに参加している児童生徒、それから教育支援室に通っている児童生徒は、みなさん出席になっていると思うが、どこにも出席ができていない児童生徒というのは、不登校児童生徒の中、あるいは長欠の児童生徒の中で、どれくらいの割合がどこにもつながっていないのか、そういう数字がわかっていたら教えて欲しい。

【事務局】

そのようなはっきりした数字が、今手元にないので後ほどお答えする。

(令和3年度の不登校児童生徒数が1,530人。そのうち約500人がどこにもつながっていない状況にある。)

○議題(2)「教育委員会が考える「ゴール」について」

【事務局】

「資料5 議事(2)～(4)関係」にもとづき説明

【C構成員】

教育支援室が、市内4か所あるという話があったが、門司区、若松区、戸畑区、八幡東区にはない。それぞれが交通機関を使って通学しているので交通費もかかる。給食もないので昼食の費用もかかる。そういうことも考えると、できれば

教育支援室が4か所だけでなくもっと増えるといいなというような思いがあるが、いろいろ予算等、難しいところがあると思う。「教育支援室の充実」というこの言葉の意味について、数を増やすとかそういったこともお考えになっているのか。

#### 【事務局】

たしかに今、4室しかない。教育委員会に移管して、まだ2年目である。教育委員会としても多ければ多いほど、いいとは思う。しかし予算もかかり、すぐにつくるということは非常に難しい。まずは現在ある移管した教育支援室を充実していく。それから、「未来へのとびらオンライン支援室」というオンライン上の教育支援室、通所しないでも、教育支援室に近い支援が受けられるような場を今年設けた。今後充実させていきたいと思っている。

特に、今年から希望する参加する生徒に対して、個別の1人のチャンネルをつくっている。一斉に入るチャンネルではなくて、1人用のチャンネルを作って、そこで顔を出してもいいし、SCやSSW、担任と相談体制ができるように、手厚くやれるような体制を今作っている。ここを充実させることに、注力したいと考えている。

#### 【B構成員】

サードプレイスとして、市民センターが居場所として活用できたらと思う。私たち「親の会」では市民センターで不登校の子を持つ保護者の方が集まる「おはなし会」というものを開催しており、その中に館長も参加して下さっているが、来られた親御さんのお子さんの中で、登校途中に公園でずっと過ごしていたという女子中学生の話があった。こういうご時世でもあり、防犯面を考えると心配になる。市民センターであれば、保護者としても安心だと思うし、何より子どもたちにとっての居場所となる。市民センター全館ではないにしても、ちょっとでもサードプレイスとして市民センターが居場所として増えるといいなと思った。

#### 【A構成員】

タブレットを子どもたちに1台ずつ配布している。これを軸にして、いろいろな取り組みが行われているが、子どもたちに実際いろいろ聞いてみると、タブレットが学校だという子もいる。だからタブレットを使っていたら自分の家とか自分の部屋に学校が入り込んでくるように感じる。それくらい学校を拒否している子どもに対してのアプローチの方法がどんなふうにしてとれるかというのが課題だなと思う。タブレットで対応して元気になる子もいると思う。でもその中にタブレットそのものが学校の手先みたいに、スイッチも入れるのも嫌だという子どももいる。そういう子どもには、どうしたら我々の声が届くだろうかというのはもう少し考えていないといけないという気がする。そういう意味で、市民センターのようなところに、子どもの話を聞いてくれるおじさんおばさんが

いて、そこに行ったら勉強の話じゃないけど、いろんな話を聞いてもらえるというのはその良さがある。そのような市民センターに子どもの居場所があれば大事なことかなと思う。

フリースクールもいろんなフリースクールある。どちらかという学習指導中心のフリースクールが、極端な話、成績が悪いともう来なくていいよという話もある。ところがフリースクールによっては、勉強も教えるけど、元気になって欲しいなというところまでやっているところもある。いろんな方針がある。かえって学習指導中心で、進学というもののウエイトに置いているようなところでは、そこで落ちこぼれると学校でも落ちこぼれてしまう。フリースクールも行けないということで、心の傷がより深くなる可能性もある。私たちが、サードプレイスとしてふさわしいという場合のフリースクールの内容は、ある程度押さえておかないと塾みたいなフリースクールがあるので要注意かなと思う。

#### 【事務局】

今年の5月から小倉南区の若園市民センターである取組が始まっている。北九州市立大学の学生さん、地域の皆さまが子どもたちを見守りましょうということで、市民センターの中に一区画設け、子どもたちを支援している。地域の中学校から不登校支援の先生が出向いて行って、校外のステップアップルームのような場所をつくっている。できたら第2回の会議でその取組についてご紹介したいと思っている。

タブレットそのものが学校に見えてしまっという話、もう一つはフリースクールが進学塾のようなものがあるという話があった。実は、不登校特例校を調べていく中で、進学塾のような不登校特例校があることもわかった。学校にはほとんど通わないが、進学塾のような感覚で、そこで学んでみんながうらやむような私立高校に進学していくという話も聞く。果たしてそれが不登校の子どもたちの居場所なんだろうかという話になる。その見極めが大事だと思っている。不登校特例校についてもどうあるべきかということもよく考えていきたい。

#### 【D構成員】

私の所属する福岡県立大学でも学生がフリースクールのボランティアをしてくれている。お子さん方も1対1で関わってもらったほうがいいという方と、勉強中心に教えてもらいたいとか、集団でいたいとか、多様なお子さんが来られている。結構 学生のボランティアに支えられている面もある。支援をするには、やはりマンパワーがいる。多様なお子さんの要望に応じるような形がないと難しいと思う。

○議題（３）「ニーズ調査の手法・調査内容について」

【事務局】

「資料５ 議事（２）～（４）関係」にもとづき説明

【Ａ構成員】

アンケートの対象者がステップアップルーム利用者、教育支援室利用者、みらいへのとびらオンライン教育支援室の参加者ということで、ある程度、学校を拒否しているのではなくて、何らかの形で登校したいとかそういう意識のあるお子さん。先ほど言ったそこから漏れているお子さん。その子たちのアンケートをどうやってとっていくのか。話をしてくれる子どものニーズはわかるが、話をしてくれない子どものニーズの中に大きな気づきがある。私は福岡県の引きこもりの支援の対策委員もしているが、例えば、生活保護の件で言えば、生活保護の申請をすれば、あなたは要件を満たしているから申請してくださいという話をする。その人も行政サービスを拒絶している、学校を拒絶するように。ずっと話をしても、いつまでたっても申請されない。そのとき「なぜ申請しないの」と聞いたら、「申請って何ですか」という質問が返ってくる。ひょっとすると、学校との距離があるお子さんが、我々は当然このことはわかっているだろうという前提でアンケートをするが、その前提がない子どももいる可能性がある。逆にいえばそういった子どもたちがもっているニーズが、ステップアップルームにいる子どもたちにも妥当するようなニーズがあるかもしれない。セーフティネットというか、ひっかからない子どもたちへのニーズ調査をどうすればいいか。私自身も難しいテーマでもある。これから北九州市で考えていく上で、考えどころではないか。結構大きなヒントが得られるのではないか。

【事務局】

令和３年度の不登校児童生徒が最新の数であるが、北九州市で小中学生をあわせて１５３０人いる。そのうちの５００人くらいが学校内外でどこにもつながっていない、学校との距離をとってしまっている方だと思う。私たちの施策の指標としては、いろんな選択肢を増やすことでこの５００人、どこにもつながっていないお子さんたちを減らしたいということである。お子さん自身は、学校や先生と距離をとっているが、親御さんは定期的に情報を欲しいと言ってくさっている場合があるので、そういった場合は、親御さん経由でお子さんの情報を聞いたりということは１つの方法なのかなと思う。

もう１つはお願いになるが、親の会の皆さんやフリースクールの保護者の会の皆さんなど、そういった方々からのネットワークを頼って、学校からの連絡は一切聞かないけれども、同じ環境である保護者の皆さんからだったら、情報が集まるのではないかなということも期待もしている。その際はお力添えをいただきたい。

### 【B構成員】

不登校の子どもたちは、不登校になった理由を親にも言わない。親も子どもの気持ちが変わらないで悩んでいる。

### 【事務局】

アンケートの対象者をどうするかということについて、本当はどこにもつながっていない子どもの声こそ聞くべきではないか、そういう声を聞くにはどうしたらいいか、そもそもそのような子に対してアンケートを行うことが本当にいいのか、などいろいろ検討をしたが、まずはステップアップルームや教育支援室に通う子どもたちを対象にしようということで今回提案させていただいた。

### 【C構成員】

アンケートの質問項目で（6）からの質問であるが、「今の学校以外で通いたい場所があるか」と対象のお子さんが聞かれた場合に、どういった場所があるのかというのがわかっていないと答えられない。選択肢を用意したほうがいいのかなと思う。私が学校で支援している子どもをイメージしたときに、「学校以外で通いたい場所があるか」と聞かれてピンと来るのかなど。フリースクールという意味も、フリースクールというのがどんな場所なのかということも子どもが知らない。特例校ももちろんだが。フリースクールの説明も難しいが、質問するんだったらフリースクールとはどんなところかということもきちんと説明をした上でないと質問項目としては、私たちが期待する答えが返ってこないのかなと思う。

「今の自分にどんな場所があるとよいか」という質問も非常に抽象的で、難しいのかなと思う。教室で過ごしている子どももコロナで体験の機会が少なくなってしまって社会的な知識などが得る機会がなかったが、それ以上に、ステップアップルームや教育支援室の子どもは、さらに体験の幅がせまい。「今の学校以外で通いたい場所があるか」という質問に答えられるのかというのが心配である。具体的な例示等があったほうがいいと思う。

### 【事務局】

アンケートについては、フリーワードで答えてというのは難しいと考えている。いくつか選択肢を用意して、例えばこんな場所、教育支援室であったり、フリースクールであったり、習い事であったり、例示を示していきたい。また、回答方法については紙ではなく、オンラインで回答していただこうと考えている。1人1台端末からでもスマホでもいいですよという形にしたい。QRコードで入れるような形で考えている。アンケートは例示をあげ、イメージがわくように工夫していきたい。

### 【E構成員】

アンケートの内容のことがだが、ニーズ調査なので、6番から10番までの内

容がこちらが知りたい質問となっていると思うが、このアンケートに答えた内容については、集約して在籍する学校へ送っていただけるのか。

【事務局】

我々が今考えているアンケートは個人の特定はしないようにと考えている。ちなみに福岡市が行ったアンケートでは、何年生ですか、どの区に住んでいますかということを知っている。ざっくりした話で、小倉北区の生徒さんですよということで、統計的なお話としてお答えすることはもちろんできるが、残念ながら、特定の学校の生徒さんが何を望んでいるというところまではお返しすることは難しい。

【E構成員】

子どもが答えたら、保護者も答えなければならないということではないということか。答えたい保護者だけが答えてくださいという感じのものか。

【事務局】

そのように考えている。

【F構成員】

中学生向けで、もちろん小学生向けもあるということだが、質問項目は少しずつ変わってくると思うが、小学校はやはり1年生から6年生まで幅広くいるので、1年生にステップアップルームを利用している子もいるところだが、この質問をかみくだいても難しいかなと思う。それから10問あったら1年から3年生くらいは答えるのは少しきついかと思う。少し小学生向けとして質問項目を減らしたりとか、記述ではなく選択式であったり、色を塗ったりとかで回答できるようにしていただければと思う。

【事務局】

今のところの想定は、小学校4年生から中学校3年生までで質問をしようと考えている。お子さんにあわせて、小学校4年と中学校3年生が同じ質問というわけにはいかないと思うので、質問数を減らすなど変えていきたい。

【G構成員】

私は今高校の生徒を対象にしているが、シャルマ先生にもスクールカウンセラーとして来ていただいている。どの生徒に対しても、いろんな方が支援をしているが、どの方に聞いても家庭に問題があるという。そういうケースが8割以上。本人が抱えている問題というより、家庭が抱えている問題が大きいだらうと私は思う。

昨日も、三者面談の予定だったが、本人は来ず、お母さんが1人で来られた。行きがけに突然子どもが行きたくないと言い、「あなたは学校辞めたいの、続けたいの」と親子げんかになり、子どもが「もういい、辞めていい」と言った。そ

こに大きな問題があつて、母親の声かけ、本人は行きたいけど行けないっていう悩みを抱えているのに、そのレベルではなく、学校を続けるのか続けないのかという答えを求める。親と子の、家庭でのやりとりにたくさん問題点があると私は思っている。だから、保護者を対象にされている親の会のような活動を活発にしていだいて、親からの声かけとか、そういうレベルの話を進めていった方が、解決が早いのではないかと私は思う。

これも今、中学生向け生徒にスポットが当たっている。次は、小学生向けとなると思うが。問題は私は保護者にあると思っている。もっと具体的に家庭でどうあるべきかということ話を進めていったほうがよさそうな気がする。

私の学校を受験するレベルの生徒たちの話じゃないかと私はずっと聞いていた。学校に、高校に行こうと思える生徒を対象にしている。だから、それ以外のいわゆる高校に行くか行かないかっていう以前のレベルの生徒さんたちの家庭はどんなだろう。逆に、私はそういう生徒の保護者とは、接することがないので。

そういうお子さんは本当に、小学校からずっと不登校で、やはりこういったセーフティネットで支えていかなければならない子どもたちだと思う。ちょっと視点を変えて、保護者の方に向けたほうが、少し解決が早いのかなというふうに私は感じている。

#### 【A構成員】

今の話、すごく耳が痛い。私自身が不登校のことがわかっていない父親だったので、我が子が不登校になった一つの理由だと思う。至らない父親が少しでもまともな父親になるためにどうしたらいいかということを考える場所として、最初の活動として「お父さん研究会」というのをはじめた。とにかく仕事と家とで、家では子どもが不登校で。そういうことに悩んでいるお父さんはいっぱいいた。知恵を寄せようということではじめた。

子どもが不登校になる原因はいろいろあると思うが、親子関係で悩んでいる子どもも結構いる。私は、福岡市でやっている保護者支援の教育委員会の窓口をいろいろ探して尋ね歩いた。最初の窓口は、生涯学習課だった。学校の学校指導課というのは子どもが対象。生涯学習課となると大人が対象。じゃあお父さんお母さんたちのそういう窓口は、生涯学習課でやりましょうとなった。今14年目になる。

そこには、最初来られた時はご本人ですら子どものこと愛しているのかと思うような人がいても、じっくり考えていく中で、本当に子どもを愛しているんだなと気がつく。そうした時に、親子の関係が劇的に変わって、子どもが元気になっていく。

そういう場を、こういう不登校対策の中に、子どもを対象として施策だけでなく、その子どもの最大の環境である家庭とか、親とかそういう人たちへの支援は、

どうしても欠かすことができない。

私の次女が不登校で、中学校はほとんど行ってない。博多青松高校の1期生である。中学校は、わずか数日くらいしか行ってない。中学を出て働いた。レストランのウエイトレスとして。18歳になって、勉強が足りないと言って、どうしようかという時に、博多青松高校ができた。その3部が夜だったから、それだったら行けるのではということで、志望して入学。働きながら学び、休みの日は昼間の授業を受けたりして、3年間、21歳で卒業した。いろんな子どもがいるし、やはりそういう子どもを見守っていけるようになってもらおうと保護者も幸せになる。保護者の方も本当に苦しんでおられる。そういう方々のためにもこういった施策が必要だなと思う。

○議題（4）「今後の会議の進め方について」

【事務局】

「資料5 議事（2）～（4）関係」にもとづき説明

【H構成員】

現在、エールで様々な関係機関と連携しながら若者支援を行っている。不登校支援は15歳までで終わりだよということではない。教育委員会や子ども家庭局、産業経済局、保健福祉局など市役所の中での連携も必要である。また、市民センターや子ども食堂などの様々な機関からの関わりも必要である。

【事務局】

縦割りの弊害を実感していらっしゃるということだと思うが、そうならないように教育委員会として責任を持たなければならない。側面から支える色々な施策があるので、そこをつなぎあわせられるように、しっかり連携を図っていきたい。

○「今後の進め方について」

【事務局】

「資料5 議事（2）～（4）関係」にもとづき説明

○最後に事務局より、第2回会議の日程調整の件、第1回会議の議事録確認の件、追加意見があった場合の提出期限の件について説明があり、会議は閉会した。

以上。